



カストロに逢いたい！

photo & text TARO OKAZAKI

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

今年の3月頃、吉田太郎さんが書いた「有機農業が国を変えた／小さなキューバの大きな実験」という本を読んだから、カストロという指導者の魅力にやられた。(オカザキマガジンNo.333参照)

続けて、吉田太郎さんの「2000万都市が有機野菜で自給できるわけ／都市農業大国キューバリポート」を読み、次に戸井十月さんの「カストロ、銅像なき権力者」、そして「キューバを知るための52章」と「キューバ万華鏡―私のキューバ体験」という複数の著者によるオムニバスを読んだ。

戸井十月さんの本はカストロに出会うまでの物語仕立てになっていて、大変読みやすかった。おかげで益々カストロという稀代のリーダーが持つ素晴らしさ、ユニークさに参った。後はゲバラ関連で「チェ・ゲバラの自伝」とゲバラの青春を描いた「モーターサイクルダイアリー」の2枚をDVDで観た。パッケージから勝手にお気軽青春映画かと思っていたが、苦く感傷的だった。

そういえば以前NHKでカストロの自伝が映画で流れていた、とメール道の久米さんから聞きアマゾンで探してみると、巨匠オリバーストーンが監督したドキュメンタリーがあることが判明したが残念ながらリージョンが米国の海外版DVDしかなく、日本語版は出ていないようだ。

もちろん英語版をリージョンフリーのDVDで見ても意味がわからないので無理はしない。

そんなわけで、今年はNYをお休みにしてキューバへ行くことにした。

カリブ諸島は、2年前のジャマイカ以来だ。ケイマン諸島やバハマも興味深い。1カ月くらいの滞在ならぐるりと回れそうだが：今回はキューバとリンクンにしよう。

さてキューバまではどんな経路になるのだろうか？さっそくネットで調べてみた。

数年前に成田→キューバの直行便があったようだが、最近ではカナダやメキシコ経由というのが一般的なようだ。アメリカはキューバに対して長年の経済封鎖を実施中で国交を遮断している（おかげでアメリカ国内ではキューバハバナ産のシガーは流通していない）。

反対にキューバ内では、アメリカンエクスプレスなどクレジットカードが使えないそうだが（これは行けばわかるので後日レポートしたい）。

コストや時間を調べた結果、成田からダラス、そしてメキシコのリゾートカンクンに飛び、そこからセカンドトリップとしてキューバへ向うことにした（僕の旅をサポートしてくれらるハマにもここで感謝しておこう！いつもありがとう！）。

成田→ダラスが約11時間。ダラス→カンクンが約4時間。カンクン→ハバナが1時間。飛行機だけでも計16時間。

これに待ち時間をいれると24時間まるまる。移動に1日という計画になる。ちなみに24日に日本を発ち、31日に帰国の8

日間移動をのぞき、正味5日は時間が自由になる。

仕事の合間を縫ってこれが今回の限界だ。1日はそのまま東京で打ち合わせだ。

ちなみにキューバはスペインの植民地だった歴史から、言葉はスペイン語である。もちろん僕は「ムーチョ」と「グラシアス」「セニョリータ」「ボナペティ」程度しかわからない。とりあえず旅の指差し会話帳をアマゾンで購入する。

後余談だが、通貨はドルの交換ができないらしいので、空港で忘れずにユーロに交換しなければ！

さて、この半年間のモチベーションシートの「今日一日強く想ったこと」を集計してみると、なんと「キューバ」は7回も登場していた。

それだけ意識していたからなのか、出張中に東横インの小さなテレビをオンにすればキューバの映像が流れだし、担当編集のHさんからはキューバ在住の日本人を紹介された。そんなシンクロとも呼べるような現象も、たびたび起こった。



24日朝7時、福岡空港から成田、そして相変わらず接客は最低のAで11時間がかりでダラス、そしてカンクンまで3時間。そこからメキシコ航空でキューバへ約1時間の長旅。

どれだけ遠いかを書いてもおもしろくないので、とんでもなく遠いだけお伝えしたい。それよりも問題は入国・出国、そしてチェックインだ。

先日起ったロンドンのテロ未遂以後、さらにセキュリティは厳しさを増している。ライターの機内持ち込みNGはもちろん、預ける荷物の中へもNGだ。また歯磨きチューブのような練りモノの機内持込もNG。おかげで買ったばかりのハンドクリームを取上げられた(ZIPロックのような透明のチャック袋に入ればOKだそうだがどんな理由なのだろう)。ちなみに液体物の持込は一切NG。なのでお土産のお酒は

預けることになる。しかし一昔前だと、もし酒の瓶が割れでもすれば他の客の荷物にも影響するから必ず機内へ持ち込めと言われたもんだが、ルールはあっさり変更になったわけだ(それから搭乗ラウンジ内で買ったペットボトルのジュースやお茶も、持ち込みはNGである)。

上記のようになかなりシビアだ(キューバ土産は葉巻と決めているのだが、ダラスで没収にならないか心配である)。

日本を出国↓アメリカ入国↓すぐに出国↓メキシコに入国↓すぐに出国↓そしてキューバへ入国と、出国入国をそれぞれ3回繰り返したが、中でもキューバへの入国が一番シビアな印象だ(飛行機を降りるとすぐに2匹の麻葉犬がいた)。

夜の22時に老朽化した空港へ到着したこともあるが、かなり陰険な感じだった。入国審査

というのは、その国の第一印象を決めるわけだから、作り笑いでもして「ハローセニョール」くらい言わせるべきではないのか？

2つほど質問をされるが、スペイン語で何かまったく検討がつかない。とりあえず「ツーリスト」と応えようと、こいつはアホかと呆れた顔で「ゴーゴー」と邪険にされた。

ついで入国後に税関でX線検査だ。全員検査など馬鹿らしいことをしているのは日本くらいに思っていたが……。

カンクンの空港では、入国者にボタンを押させ、まるでクジのように検査する対象を決めていた。緑のランプでスルーできる。

緑のランプが点灯するたびに担当のメキシコ人が「ラッキィ」と笑っていた。

カストロに逢いたい！



カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

キューバのホセマルティニ空港で待たせていた現地の通訳を発見し、タクシーでハバナのど真ん中にある「パルケ・セントラルホテル」へ向った。

通訳のキューバ人女性の日本語は酷く、「明日観光したければ電話しろ、地球の迷い方という本は嘘が多いからね」と何度も繰り返していた。僕は何も約束せずに彼女とロビーで別れる。

時計を見ると、すでに23時を回っている。部屋に荷物を降ろしシャワーを浴び、遅い夕食を食べに街へでた。

街は真っ暗とまでは言わないが暗い。もちろんコンビニなど無い、どこかバーくらいと思いがちだが、現地人らしきカップルが歩いている。方向を間違えたのか、だんだん寂しい場所になってきたので一旦ホテル側へ引き返す。

ホテルの入り口で、困ったなあと思っていたら男が声を掛けて来た。

一瞬「危険」と思う。なにせ、こんな時間にこんな場所で声を掛けられてノコノコ誘いのるほど僕は馬鹿ではない……が、腹がへった。男はスペイン語から英語に切り替えると「俺は今から少し飲むが、一緒に行こう」と言う。こんな時間だ。1人で探すのは無理だから一杯くらいなら、と思いき直に男の後ろを歩いた。

3分もしないでカフェ風のバーに着いた。僕はフローズンダイキリ、男はキューバのビール「クリスタル」を頼んだ。

男の名前は「エンリケ」35歳。

両親はイタリア移民。タクシードライバーで結婚していて7歳の娘がいるそうだ。

なかなか気のよさそうな男だが、しかしまだ信用するわけにはいかない。

メニューをみるがフードが無い。男に「腹がへった」と伝えようと、別の店を紹介される。ダイキリを一気に飲み干しその店へ向った。

男から「モヒートを飲め」とすすめられる。後はフライドチキンを頼む。日本人が珍しいだろう。店の客が次々に挨拶に来る。スペインギターを持った黒人とイタリア系の歌手の2人組がラテンを奏でる。

なんだかようやくキューバに来了感じがしてきた。

調子よくどんどんモヒートを流し込む。歌のお礼にモヒートを振舞う。2人組みの若い女が隣に座るエンリケの友達だと言う。もちろんモヒートをご馳走する。

身長190cmはあろうかという黒人がやってきて「柔道で日本に2回行った。俺は山下を知っている。あとお刺身な」と英語で声を掛けて来た。この男にもモヒート。そんな感じで夜中の4時まで飲んだ。

勘定をして驚いた。450キユーバペソだと言う。「？」アンブリーバブル！ありえない。キユーバ人の平均月収が150ペソなのに3倍の450ペソだ？（1ペソは約100円）しかも持ち合わせが200ペソしかない。

明日払いに来ると行つてとりあえず店をでる。

「ぼられたのか？」

安心しての飲みすぎだ。反省

25日キューバ2日目。

昨日の深酒もなんのその、目覚めは最高だ。

エンリケが11時に迎いに来るので、その前にメルマガの原稿を送信しようとホテル内のビジネスセンターに行く。1時間12ペソでアクセスコードの書かれたカードをもらう。

ところが自分のノートパソコンは繋げないと言う。仕方なく一旦部屋に戻る。

さてどうしたものか……。とりあえずUSBメモリーに原稿データを移し、再度ビジネスセンターへ。

しかし困ったことにUSBのポートはあるのだが、デスクトップが固定されていて、ファイルが開かない。それにHOTMAILのアドレスを持っていないので新しく作ろうと試みるが、なにせスペイン語で見当もつかず全くわからない。困った。せっかくリアルタイムでメルマガをと考えていたのに、時計を見ると11時だ。ロビーでエンリケを待つ。

昨日の残金を払わなければならない。銀行に行く。キャッシュは無い。クレジットカードでお金を引き出したいと伝える。おどろいた。どうやらVISAとMASTERCARDは使えるのだが12%ものチャージを取られる。なんてこった、日本国内での手数料を考えると馬鹿高いにもほどがある（日本円は交換できないが、USDドルやメキシコペソは問題なく換えられる）。



待っていたエンリケに20ペソを払う。「それにしても高いな」と嫌味を一発するとエンリケが困った顔で「だってお前、75杯も飲んだんだぞ」と言うので「What?」「75?」と僕は聞き直す。

信じられない。僕はたったの5杯しか飲んでいない。どうやら店の全員に気前良く奢ったらしい。

それにしても75杯とは…。今日からは1ドリンクオーダー毎に支払うことにしよう。

球型のFRPカバーが付いたコタクシーと言う人力車にバイクのエンジンを積んだ乗り物で市内を散策する。とりあえず葉巻工場へ、エン

リケの友人が裏モノを安く譲ってくれるそうで「ジャスト・ルッキング」と釘を刺される。工場の販売所をひと回りすると、工場の裏手にある雑居ビルに連れて行かれる。階段を3階まで登り、少し直進し小さな部屋に入る。

棚の中には様々な葉巻が箱で並べてある。

エンリケの友人は「ハーフプライス2000ペソ」と笑顔でCOHIBA/SIGLO/VIの25本入木箱を僕に手渡した。

計算すると1本800円である。正直これが安いのか不明だがせっかくなので購入する。20ペソで10枚。金を渡すと僕は、さっさと部屋を後にした。なんとも違法の臭いがプンプンする。

ビルを出ようとする、COHIBA/ROBUSTOSを箱で持ってきた。「ユーフレンド、オンリー100ペソ。ニューシガー」と手渡す。

おいおいガラスで没収されるかも知れんのにと思い「ノー」と言うと「OK 80ペソ」と値段を下げたので購入した。

1本約320円は安いだろう(キューバ人はアジア人に比べ粘りがナイので、3回も断ると売込みをやめてしまうので交渉には注意が必要だ)。

さて50本ものシガーを購入したものも、無事日本に持って帰れるのか? あつ。

葉巻の製造工程を見るのを忘れてた!明日また来よう。





カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

5日キューバ2日目 昼

市内をひと回りすると、喉が渴いたのでヘミングウェイが愛した『Folldita』というバーへ。キューバで一番ダイキリが有名なこの店は、今日もフランスやスペインのツアー客で溢れている。

とても精巧に出来たヘミングウェイの等身大銅像がカウンターには寄りかかるように立っていて、絶好の撮影ポイントだ。

もちろんフローズンダイキリは最高に美味い！

昨日飲んだダイキリも美味しかったが、ここのダイキリは格段で甘くないバナナチップとの相性も素晴らしい。

テーブルには真紅のカバー。天井が高く照明は暗めで内装はヨーロッパ風で洒落ている。壁にはフィデルカストロとヘミングウェイの白黒写真が飾られている。

次にヘミングウェイが愛したハバナの旧市街地区にあるモヒートの店へ。(La Boodeguita Medio)

どうやらヘミングウェイはダイキリはこの店、モヒートはこの店と決めていたらしい。興味深い話だ。

とにかくどの客も「モヒート」を注文する。キューバフードもあるようだが誰も注文していない。とにかく名物のモヒートを飲みたいのだろう。

手前の部屋にカウンター9人。ただの椅子が4人分一杯の狭い中に4人の生バンドが肩を寄せ合い演奏している(奥は

カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006



テーブル席メインのレストランになっていて壁一面サインだらけだ。

店の外までモヒート狙いの列が続く。

カウンターでは男が忙しそうに、グラスをズラリと並べ流れ作業でミントの葉と砂糖を入れ、そこにソーダを注ぎ棒で潰しにかき混ぜる、次にハバナクラブを注ぎ、最後にアロマビターを2滴ほど垂らすと、カラフルなストローを立てて出来上がりだ。

モヒート一杯4ペソ。1日何倍売れるんだろうか？

この後、ハバナクラブの工場を見て、クラシックカー博物館をぶらり見て、最後はスペイン料理の店でロブスターを食べた。しかしアンモニア臭が強く食べれたものではなかった。

今のところキューバのご飯はお世辞にも美味しくない。

サラダは生野菜が種類別に並んで出てくる。ドレッシングは無い。酢とオイルそして塩と胡椒を好みで味付けする。

長い間「肉」中心だったキューバ人の嗜好のせいかな、野菜の食べ方に対し文化が薄い。ソビエト崩壊によるキューバ危機によって推進された、都市型有機農業のおかげで野菜は新鮮だから、もっと食べ方を研究すればと思う。

キューピーのドレッシングなんか最高のビジネスチャンスではなからうか(もちろんホテルのレストランにはドレッシングがあるが、洗練されていない)。

しかし、どの店でもシガーの香りに包まれた中、生バンドが演奏をしている。

これぞキューバだ。

午後4時。

時差ぼけが強く、激しく睡魔が襲う。一旦ホテルで仮眠。

夜7時にホテルのロビーと約束してエンリケと別れる。

ベッドに倒れこむと直ぐに深い眠りについた。

25日キューバ2日目夜。

午後7時。エンリケのいるロビーへ。

このビジネスセンターでは日本語が使えないので、他にネットカフェは知らないか、出来れば融通の効きそうな店と質問する。

エンリケはホテルのガイドを捕まえると、機関銃のようにスペイン語で答えを引き出した。斜め前の「INGLATERRA HOTEL」の1階にあるネットカフェが、安くて評判がいいらしい。

値段は20分2ペソ・30分3ペソ・60分5ペソとリーズナブルだ。

6台あるパソコンは全て使用中だったが、すぐに僕の番がやってきた。さてと夕食の前に一仕事だ。

たまたま空いたブースに座ると、さっそくレシートに書かれたアクセスコードを入力。

画面が切り替わり「ネット」と「MAIL」そして「オフィス(エクセル・ワード・パワーポイント)」の専用メニューが開く。



カストロに逢いたい！

USBメモリーを本体に差し込みエクセルで開いてみる。

エクセレント！

日本語が表示される。次はブラウザを開き、言語を日本語に設定しヤフージャパンに接続。「やったー」

日本語が表示されている！
ちよっぴり感動する。

エクセルに表示された文章を「すべてを選択＋コピー」。
ヤフーのWebメールに貼り付け送信ボタンをクリック。

ようやく送信ができてホッとする。明日も来よう。

午後7時45分。

旧市街にあるキューバレストランで食事することに。
エンリケが「ピュッ」と口笛

を吹くと3階から何かが落ちてきた。

ボトツ。

コルクの詰まった500mlペットボトルに鍵が着いている(セキュリティで一階は自動電子ロックが掛かっているのだ。

細い階段を3階まで登ると驚いた。なんとも本格的なレストランなのだ。「ここは有名なキューバレストランだ」とエンリケが耳元で僕に伝えた。

メニューには親切にスペイン語の下に英語が併記してある。僕は「チキンのグリル」、エンリケは「イカの煮込み」とダイキリを注文した。

雰囲気は最高なのだが、味はイマイチだった。

午後10時30分。

レストランの帰り道でエンリケの弟とばったり。弟は人力車の運転手で、ホテルまで送ってもらう。

部屋に戻りシャワーを浴びると、今日の出来事を整理しメルマガを書きはじめた。時差だけで全然眠くない。困ったものだ。





そこには老人が杖を持ち椅子から立ち上がり手を差し出した。僕は握手をする。小柄だが、どこかインディアンの酋長のような威厳がある。

「彼は40年間ここに住みモニュメントを守っているんだ」男は話を続けた。

確かに3畳ほどの狭い空間にベッドにTV、冷蔵庫にガステーブルと生活しているらしい。壁は淡いグリーン。窓は無い。

老人の名は Montalvo 75歳、もともと革命の戦士だったそうだ。ちなみにガイドの名はロベルト32歳。

なんとも不思議で奇妙な光景だ。



カストロに逢いたい！

カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

26日キューバ3日目 朝

朝7時に目が覚めた。外が少し白んできたので、朝焼けを撮影できるかもと僕はカメラをリュックに投げ込みホテルを出た。

ホテルの裏手を1kmほど歩くと海岸に出る。目の前が有名なモロ要塞だ。陽気なカリブ海をイメージしていたのだが、波は日本海のように高く険しい。防波堤で釣り人が数人見える。生活のための漁だろうか？。

海岸沿いを右に折れ、朝日が昇る方に向う。

遠くに色とりどりのスペイン建築がオレンジに染まっていた。

もつともキューバらしい風景のひとつだ。

なんて美しいんだろう。

僕は露出設定を変えながら風景を切り取り前進する。

すると、広い公園の真ん中に大理石で出来た立派なモニュメントが見えてきた。強烈な朝焼けをバックにモニュメントの上にある騎乗した戦士がシルエツトになる。

絵になるなあと思いつつ、嬉しくなって角度を変え何枚も写真に撮る。ちょうど、ぐるり

反対側に回りこんで行くと、モニュメントの中段に座っているフガーシャツを着た男と目が合う。

「お前は日本人か？」大柄な男が僕に声を掛けてきた。

「そうだ」

「こっちに来てみる興味深いものを見せてやる」

男は僕を手招きした。

まあこんな朝から変なことはないだろうと思いつつ階段を登る。

この像は60年前にイタリアから贈られたものだ、この戦士は

当時の将軍で彼の栄誉を称えたもので、小さなピースに分解

して船でイタリアから運んだんだ。ほらここに継ぎ目がある

だろ」と笑顔で話しはじめた。

「あなたはガイドなのか？」男の流暢な英語に僕は尋ねた。

「そうだ僕はガイドだ。しかし彼はここに住んでいる」そう言う

と彼は振り返り扉を開けた。

「住んでいる？」

僕は男の背中越しに中を覗きこんだ。

そこには老人が杖を持ち椅子から立ち上がり手を差し出した。僕は握手をする。小柄だが、どこかインディアンの酋長のような威厳がある。

「彼は40年間ここに住みモニュメントを守っているんだ男は話を続けた。

確かに3畳ほどの狭い空間にベッドにTV、冷蔵庫にガステーブルと生活しているらしい。壁は淡いグリーン。窓は無い。

老人の名は Montalvo 75歳もともと革命の戦士だったそう。ちなみにガイドの名はロベルト32歳。

なんとも不思議で奇妙な光景だ。

ロベルトの説明を要約すると、その昔カストロが時の政権をバチスタを転覆させた時、百メートル前にある首相官邸から当時のリーダーが地下トンネルを進みこのモニュメントで隠れた後、時期を見てフロリダに逃げたそう。今は閉鎖されたそうだが…。

「お前は日本人だから特別に見せよう」

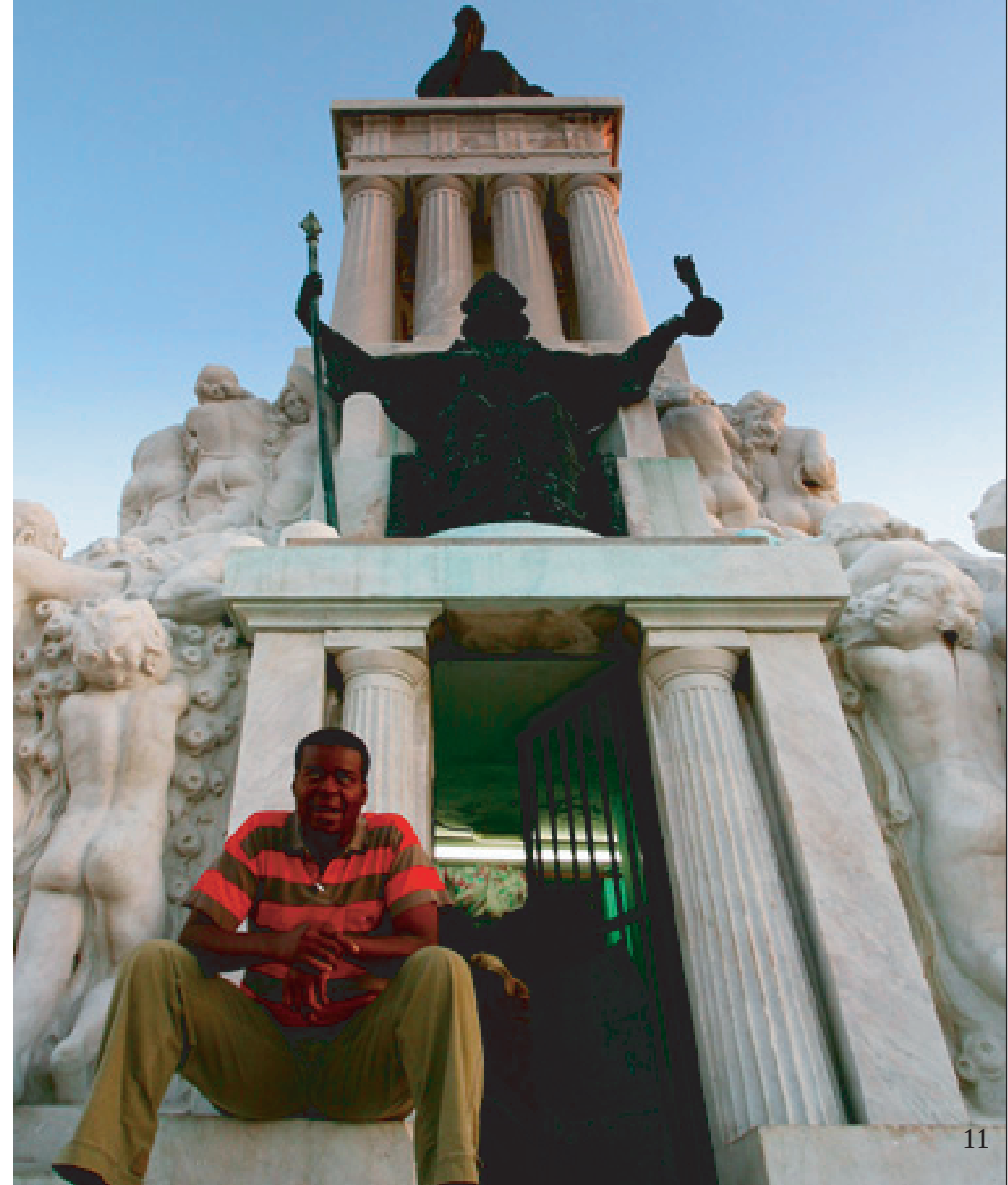
そういつて男はトンネルに続く長い階段の入り口を案内してくれた。なんだか歴史に触れた感じがして鳥肌が立った。

「写真を撮っていいか？」

「もちろん男はニッコリ笑った。どうやら早起きは三文の徳のようだ。」

カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006



26日キューバ3日目 朝。

ホテルで朝食。普通に美味しい。オムレツをおかわり。

部屋に戻ると内線が鳴った。

河出書房のH氏から紹介されていた、キューバ在住の女性からである。

「あら？岡崎さん」

「そうです。もしかしてAさんですか？」

「はい。そうですよー」

「よかった。もう会えないかと半分諦めてました」

実はキューバに入国してから持ち込んだノートPCをネットに接続できないもんで彼女と連絡が取れなくて困っていたのだ。

昨晚、H氏に国際電話で事情を説明し僕のホテルと部屋番号を伝えていたのだが、どうや

らメッセージが伝わったようだ。

「ロビーですか？今回はどうもすみませんでした。すぐに降りていきます」シャワーでも浴びようかと考えていた途中だったが、僕はすぐに準備をしてロビーへ降りた。

「どうもはじめまして」簡単に挨拶を済ましロビー奥にあるバーに腰をおろした。

彼女はキューバ危機後の一番大変だった時期から約10年この国に住んでいて、日本人としては最強クラスのキューバ通だ。

「飢餓寸前だった時もキューバ人は笑っていたのよ」と彼女はマザーテレサのような博愛の笑みを作った。話は自然とキューバの現状からカストロ議長の状態、その後のおおまかな体

制予想。そしてキューバ、ベネ

ズエラを筆頭に進むラテンアメリカの左翼傾向と広がった。

もちろん有機農業についても現在もっとも新しい話を聞くことができた。今回キューバ行きのきっかけになった吉田太郎氏とも、彼女は懇意で何度も会っているそうだ。それは初耳である。

「現在どのくらいの日本人がキューバに在住しているんですか？」
「そうね、移民の二世や三世と短期留学生を除けば30名弱じゃないかしら」

「では京都の舞妓さんと同じくらいですね」

「……」

渾身のトークのつもりだったのだが……。

カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

あつという間に時間は過ぎた。11時にエンリケが迎えにくるのだ。もっと彼女から情報を聞きたかったのだが…。

おっと、最後に彼女から重要な情報をもらった。

「葉巻だけど、アメリカ入国よりも、キューバ出国時の検査で没収される危険があるけれど、あなたの葉巻は大丈夫？」というのだ。

「えっ？ 僕の葉巻ですか…」

「そうレシートは貰ってる？」

「いえ」僕は小さくなった。

葉巻はもっとも外貨を稼ぐ輸出品目の稼ぎ頭なわけで、粗悪品が出回るなど言語道断。キューバの面目に関わる話だ。

「とにかく箱は駄目ね。バラで小分けして持ち込むしかないわ」彼女の目は、ちゃんと正規品を買わないからよ、と言っていた。

仕方ない。キューバにいる間に少しでも自己消費しよう。

26日キューバ3日目 昼

エンリケと合流。聞いたばかりのシガー没収の件を伝える。すると

「大丈夫マイフレンド！ そんな時は10ペソを差し出せばいい」
おいおいそれは賄賂ではないか…。あいにくそんな習慣は持ち合わせていない。

たいていマイフレンドと気安く言われる場合は注意が必要だ（この後、エンリケがシールを一式くれた。これを貼つとけば大丈夫。友達から仕入れたらしい）。

ココタクシーに乗って、シガー工場へー（PARTAGAS

TABACO）今日こそは製造工程を見学するぞ（入場料は10ペソ）。

ただし残念な事に写真撮影は禁止。入口でカメラは預けなければいけない（このためにムービーの撮れるデジカメを購入したと言うのに…）。

この工場では、コイーバ・ロミオ&ジュリエット・モンテクリストと名高い銘品葉巻をすべて手作業で製造している。

今まで「コイーバ」とは、会社のブランドと誤っていたのでまさか同じ工場で作っているとは…驚いた。どうやら葉っぱの選別と職人のランクでブランドを決めているようだ。

葉巻一本、最初から最後まで1人の職人が鼻歌を歌ながら手早く巻いていく。

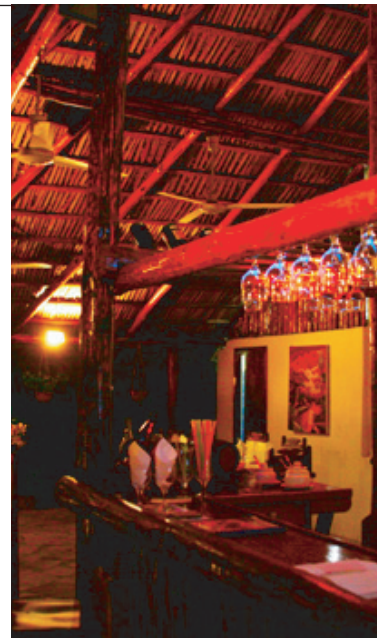
まず芯の部分。作ろうとする製品の太さを考えて葉っぱを重ねて素早く巻く。次に木型にハメ込み、万力で締め密度とカタチを安定させる。この工程の後、ぐるりと表を薄目の葉で綺麗に巻けば出来上がりだ（ちなみにラベルを貼ったり、箱詰め作業は別に担当がいる）。

僕が見学した時は、コイーバを巻いている横で別の女性がモンテクリストを巻いていた。

建物はコンクリートの4階建てだが、内装には木がたくさん使われている。きつと火事にもなればよく燃えるだろう…。僕のそんな心配をよそに、半分煙草が葉巻を啜えている（その葉巻は自分巻いたものですか？）。

そんな煙の中、ラテンが高音





量で流れている。

見学は約30分。葉巻好きでなくとも堪能できる内容ですよ！

工場をでると

「へい！ユー」と声を掛けられた。僕が振り向くと、工場の前に停められたソビエト製の古い10トントラックが見えた。運転席の男はニヤリと真つ白な前歯を見せると、一瞬しゃがみ、窓からチラリと、コイーバの束を見せた。

闇葉巻だ。

っていうか葉っぱの詰まった麻袋を運ぶトラック運転手だぞ？闇葉巻は蔓延どころか、かなり恒常的なようだ。

ハバナでは、まだ中国人には1人も見かけないが、中華街はしっかりと街の中心地にある。お土産にゲバラTシャツを購入一枚12ペソ。

まだ時差ぼけが抜けない。Folditaでヘミングウェイが考案した「パパダイキリ」試す。

ドライだ、甘くない。

やっぱりノーマルなダイキリの方がおいしいです。

一旦ホテルに戻り、昨日までのメルマガデータをUSBメモリに移し、昨晚と同じネットカフェへ(NC598参照)

同じ手順でアクセスコード

を入れ、専用画面からブラウザを立ち上げる。設定はもちろん日本語だ。

ところが…。文字化け！

何度かトライするが駄目だ。

隣のブースが空いたので一旦シャットダウンし席をかわる。

再度ログインして同様の手順でトライする。

しかし

やっぱり駄目だ。

プロパティを開き、設定を再確認する。何もおかしくないようだが…。

すると昨日使ったマシンが空いたので、再度移動する。

同じ手順を繰り返す。

エンリケが大きなあくびをしたのが目にはいる。そりゃ退屈だろう。申し訳ないがもう少し待っててくれ。

ブラウザを立上げURLを入力する。

<http://www.yahoo.co.jp/>

待つことしばらく

「ファンタスティック！日本語が表示された」

どうやら、このマシンだけは日本語が表示できるらしい。理由は不明だが、とにかくデータを送付しメールを送信する。

帰り際に店のスタッフに質問すると、男はあっさり「そのマシンのみ日本語が使えますね」と応えた。

知ってるなら早く言えよ。

午後7時30分

ロシア製タクシーでモロ灯台のある島へ、海底トンネルを抜けて渡る。エンリケお奨めの郊外レストランだ。

庭園の中に、屋根を椰子の葉で作ったリゾート風レストラ

ンでなかなかゆつたりとしている。ビールで乾杯し僕は豚のグリル、エンリケは蛸の煮込みを注文した。

つけ合せは米と黒豆の煮込みとポテト。

味は予想どおり昨日と同じ程度。

午後8時40分

ご飯の後は、毎晩行われるセレモニーを見ようとモロ要塞の中へ歩いて移動。9時から大砲を一発ぶつ放すらしい。

スペイン統治時代の石畳に建物は素晴らしく、ハバナでここを見ない観光客はいないと思う。大阪で言えば大阪城と同じだ。

続々と観光客が集まる。

午後8時55分

照明が消え、セレモニーが始まる。

真ッ赤な燕尾服(当時のスペイン軍の制服だろう)を着た7人が一列で行進をはじめた。ずいぶんと前準備が長いが待つこと10分。

号令と共に点火が実行されると爆音が鳴り響いた。

この一発は、予想に反して「とても感動的だった」

文章で表現するのは難しいけれど、星で言えば5段階の4。

海を挟んで街の夜景を見た後併設されているゲバラ記念館を見学。そして野外カフェでエンリケと最後の夜を話し明かした。なんだか「うるるん滞在記」みたいでエンリケも寂しそうだ。2人でコイーバに火をつけた。さあ今夜はハバナ最後の夜だ。



カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006

26日キューバ3日目 真夜中。

ホテルに戻ると、メルマガを書き、荷物をカバンに詰めた。

時計は夜中の1時を少しまわったところだ。

ホテルのバーが3時まで空いているので、オールドラムとコニーバを試そうとエレベータで向う。

カウンターには3人ほど先客がいて盛り上がりつつある。

3席ほど空けて座る。

日本には流通してない年代物のラムをストレートで注文し、コニーバを啜えた(日本に帰って調べてみると一部流通している)。

人生これほど葉巻を吸った日はないなあ。もう一時は吸わないかもな…肺には入れないが正直背中が痛い。そんな事を考えていたら、隣のカップルから声を掛けられた。

「よう日本人、俺を覚えていたのか？今朝屋上のプールであっただろう」

あっ！帽子をかぶっていたので、すぐにわからなかったが、散歩の後、ホテルの最上階から市街を見下ろす写真を撮っていた時、野外プールで泳いでい

たカップルだ。

「あっ！タトゥーの」

思わず僕はそう応えた。

なかなか立派なタトゥーが入っていたからだ。

男は笑ってグラスを差し出し乾杯の仕草をした。

「サルー」

この男、スイス在住の28歳、名前はファルク。職業はタトゥーアーティストで、時間ができれば身軽に世界を回るのがライフワークだそうで、キューバは12日間の休暇で訪れている。まわった国は、アフリカ・ドバイ・イスラエル・オマーン・UAE・サウジアラビア・トルコ・上海・アメリカ・ベネズエラ・ブラジル・メキシコ・アルゼンチン・ペルー…。なんだか楽しそうだ。

「日本はまだ行ったことがないが、来年はぜひトライしてみたいヤクザのタトゥーにとっても興味があるんだ！」

あはは。それはどうも。

そんな彼にハバナはどうだ？

と質問してみた。

すると少し考えた後

「今まで行った場所でもハバナはスペシャルだ。俺はスイス人だから社会主義ってのは反対

にあるわけで、いろいろと考えさせられた」と答えた。

続けて「お前知ってるか？観光客は持てない配給用のキューバペソ1ペソは、俺らの使ってる24ペソなんだ。つまりこの国には2つの通貨が存在しているんだ」

何の話だ？はじめて聞いた。僕が変な顔をしていると、男はゲバラがデザインされてる3ペソ札を見せてくれた。ガイドが記念にとくれたそうだった。

「じゃあ給与はその高いペソで払われてるのか？」

「いや150ペソは俺らと同じペソの価値で払われてる。交換も自由だそうだが」

「じゃあ地域通貨みたいなもんか？」

「さあ」

詳しくはわからないが経済危機の後に施行されたいらしい。

結局それから3時まで話しかメルアドを交換した。

「アミーゴ、俺が日本に行くときは連絡するよ」

「了解した。僕も来年はヨーロッパを予定にしてみるよ」



岡崎太郎のキューバ紀行 2006

27日キューバ4日目 早朝。
30分だけ仮眠をする。寝過ぎないように、
携帯電話の目覚ましをセットする。
高速エレベータで地下20階まで下るように眠る。
その次の瞬間。
デジタルなファンファーレで目が覚めた。
朝の5時だ。
顔を洗い、細かい荷物をバックに詰め、
忘れ物を確認し急いで部屋を出る。

nh



5時25分。一階フロントでチェックアウト。

ロビーを見回す。旅行会社の手配してくれたガイドが見当たらない。飛行機が8時だから6時までには空港へ行きたい。

5時40分。ガイドよりフライトが優先だ。

ホテル前に停まっているタクシーと交渉。30キューバペソと言われるが、財布の中にはメキシコペソとキューバペソが10しかない。全部足してあるかどうかだろうか。

全額を運転手の手に押し込むスペイン語しか話せない運転手が苦笑いで「OK」と小さく万歳をして応えた。

グラシアス。

トランクに荷物を乗せ後部座席に乗り込む。空港まで約20分だ真つ暗闇の中をタクシーは快調に走り出した。

ハバナといえば、50年代のアメリカ車やロシア製の車が現役で走っていることで有名だ。どうしても写真映えがするのはやはりクラシックカーなので、新車は走っていないような印象だが、欧州系のプジョーやワーゲンなんかの新車は走っている。ベンツやBMWは見なかったがとにかく新旧2台が並んでいるのは理屈抜きに不思議な絵だ。しかし短い旅だったなあ。エンリケとは再会することがあるのだろうか？Eメールがあるから連絡は取りやすいか…。なんて考えていたら

…あれっ？

何か変だぞ。何かおかしいぞ。僕はリュックからエアチケットを取り出し、搭乗日を見た。

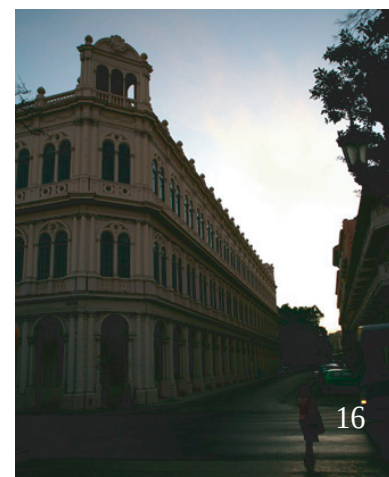
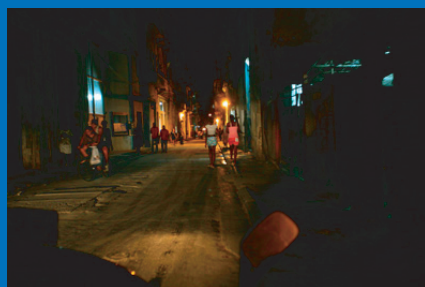
28日。
28日？
時差の関係でキューバに入
ったのは24日の22時だ。
僕は指折り日数を勘定した。
24・25・26・27・・・
もしや。
いやそんな間違いはあるは
ずがない。チェックアウトの時
に何も異変はなかったし。
うーん。
後部座席から前に乗り出し「今
日は27か？ 28か？」僕は運転手
に聞いた。だした。
「セニョーール トウデイ27
だよ」
やっぱり。そうだよ。ね1日間
違えてるぞ。ガイドもいないは
ずだ。どうしよう、このままカ
ンクン行っちゃうか？ オフシ
ーズンだからホテルは空いて



カストロに逢いたい！



るだろうが・・・でもそんなわけ
にはね。
異変に気がついたのか車は
路肩に停まってしまった。
「セニョーール？」ニョー
を伸ばすだけ伸ばし運転手が
振り返った。
僕はうつむき加減で
「ソーリー・アイ・ミステイク・
バックトゥ ホテル」と答えた。
「なっ」運転手は絶句した。
そんなわけで空港の灯りが
見える直前で車はUターンを
した。
まあ考えてみれば1日分、得
をしたようなもんだ。しかしエ
ンリケと街でばったり会いた
くないなあ・・・
情けない。



カストロに逢いたい！

岡崎太郎のキューバ紀行 2006



27日キューバ午前。

思わず1日時間ができてしまった。さて何をしよう。

そうだ「カピタリオの中」に行こう。

昨日の夜中、スイス人タトゥアーティストに訊ねた、ハバナ観光で何処が一番よかったですか？の答えである。

カピタリオ＝旧国会議事堂のことで、国立ガルシア・ロルカ劇場と並んでハバナ旧市街地の顔とも言える建物。1929年の建設でアメリカの国会議事堂そっくりなのだが、それもそのはず、設計者が本国と同じなのだ(当時キューバはアメリカのコントロール下にあった)。

そんなわけで、さっそく足を伸ばしてみた。宿泊のホテルか

ら歩いて2分。

あつもう着いちゃったという距離だ。

裏手から3ペソを払い入場する。

見上げて驚いた。全面大理石を贅沢に使った広々とした空間。少しひんやりとした空気と自然光の柔らかな明るさ。凛とした緊張感がある。天井が高いからだろうか、古い建物にありがちな埃っぽさや黴臭さはない。ファインダーを覗いて身震

いがした。裸眼よりも広角のレンズで切り取った建物の一部分が構図として切り取られ存在感を主張する。

完璧な演奏にグループが混合されたJAZZの名演に出会ったように心を討たれ。少し遅れて波のように鳥肌が身体

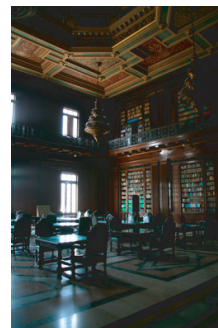
を駆け巡る。

並の感動と違うのは、鳥肌がなかなか引かないことでわかる。

お隣の国立ガルシア・ロルカ劇場の裏路地にバレリーナが1000人以上溢れていた(キューバのバレエは世界でも高く評価されていて、優秀なバレリーナをたくさん生み出している)。

バレエコンテストの出番を待っているようだ。

こんな瞬間に出会えるから街歩きはやめられない。車で移動してたら出会えない。



お隣の国立ガルシア・ロルカ劇場の裏路地にバレリーナが1000人以上溢れていた。バレコンテストの出番を待っているようだ。こんな瞬間に出会えるから街歩きはやめられない。車で移動したら出会えない。



完璧な演奏にグループが混合されたJAZZの名演に出会ったように心を討たれ、少し遅れて波のように鳥肌が身体を駆け巡る。並の感動と違うのは、鳥肌がなかなか引かないことでわかる。



カストロに逢いたい！

photo & text TARO OKAZAKI

とにかくハバナに入ってから「Guantanamera」を聴かない日はないほどで、すっかり耳タコになってしまった。ほんとに名曲だ。

一旦ホテルに戻り屋上のレストランでピザを食べる。

部屋に戻り、忘れないうちにメルマガの原稿を書き、荷物をまとめる。少しだけ開けた窓から「イパネマの娘」のジャズアレンジが聞こえる。

この4日目思い返してみるとスピーカーからの音楽は聞いてなくて全部生演奏だと気がついた。

ほんと贅沢だ。

ひと段落して時計を見ると23時。

ハバナ最後の夜、大いに飲むと部屋を出た。

ロビーを抜け、ホテルの玄関を出ようとすると、セキユリテイーが走ってきて「セニョール！」と声を掛けられた。

「こんな時間に外に出ては危ないですぞー」と言ってるらしい。昨日もその前も深夜うろついていた僕に何を言ってるかと思っただけ、その剣幕に、やっぱり危ないのかもなとホテルのバーに引き下がる。

それにしても、はじめてのスペイン語圏ですっかり「セニョール」に「セニョリータ」「グラシアス」「アミーゴ」にハマってしまった。なにせ今まで「セニョリータ」なんて言葉は知ってても口から出なかった言葉だからね。新しい回路が通電されたようで嬉しい。

深夜。

ホテルのバーカウンターに腰を降ろす。

2席あけて左に4人組の男女がスペイン語で盛り上がっている。

僕はダイキリを注文しコイバに火をつけた。

この2日で10本は吸った。

30分もしないで4人のうち3人が帰り1人残った。

この男飲み足りないのだろう。

「ハイ、ハポン」陽気な笑顔で男は僕の横の席に移動してきた。

男の名はヘサス(Hesus) 32歳 15杯もモヒート飲んでご機嫌らしい。

元彼女とその家族と旅行でハバナに来たという。

聞けば、縁を戻したい風でもない。「親友だからさ」と緩い答えが帰ってきた。

「今は馬が俺の恋人だな・・・2匹飼ってるんだ」

「馬？」

話を総合すると、どうやらお父様が大金持ちでボンボンだそうである。

「スペインに来るときは俺が面倒をみてやるアミーゴ」

「了解 来年間違いなく行くよ」そんな感じでメールを交換した。

ハバナでスペインの知り合いができるとは・・・。

飲み納めだと思い。「フロリデータ」でフローズンダイキリ。「La Boodeguita Medio」でモヒートとコイバ。
やっぱり美味しい。
その後、海沿いのフリーマーケットでお土産を物色。
すっかり夕方だ。西の空がオレンジに染まってきた。
しかし気がつくともホテルから半径1km程度しか移動してない。徒歩ということもあるけれど、それくらいハバナ旧市街は密度が濃いのだ。

ホテルの近くで4人組のアカペラグループと出会う。

キューバの第2国歌とまで言われる名曲「Guantanamera」をハーモニで聞かせてくれた。

28日キューバ最終日。
30分だけ仮眠をした。
朝の5時だ。携帯電話の目覚まし機能が役に立った。
思えばあつという間だったなあ。

結局ハバナそれも旧市街地の一部しか見れなかった。当初考えていた、キューバ農業は見る事ができなかった。まあそれでも今回の旅は充分価値のある旅だった。

それは出会いだ。

滞在中、日本人はおろか韓国・中国を含めアジア人に会わなかった。ヨーロッパの観光客は多かったが、共産圏と言うこともあつてか気楽な観光客というよりは旅上級者だと感じた。ましてフィルターのなかった夜中のバーは、特異な人間に

出会う機会が増える。

メルマガには書かなかったが、パリから1人で来た女の子。レバノンから来たテンガロンハットの兄貴。ブラジルから来たカップルに、将来映画監督を目指すアルゼンチンの大学生。ハイチのペインター。ドイツから来た写真家。それからスイス人とスペイン人のボンボン。
出会いを求めるなら出会いがありそうな場所に身を置くことだ！これ基本。

さあキューバを後にしよう。

問題は葉巻が持ち出せるかだ！

心配をよそにキューバは、問題なく持ち出せた。

ところがカンクンの入国時の税関審査で数量オーバーで25本以上は没収された。これは

予想外だった。

問題は本数だけだったようだが、本物が闇ものかを調べる場合もあるようで、注意が必要だ。葉巻についての注意を記したパンフが空港にあった。要点は2点、購入した正規店の領収書を提示できるようにしておく事と、正規品にはホログラムシールが貼ってあるそうで確認しろとのことだ。

その後ダラスはフリーパス。成田もスルーした。

もしかするとこれは単に運がよかっただけかも知れない。

ちなみにシグロの正規品をハバナで買うと約25000円くらい。ちょうど1本1000円程度ということになる(日本は定価3000円)。



カストロに逢いたい！